滋賀県立
聴覚障害者センター
だより

—102号—
発行日／令和３年７月10日
発行所／草津市大路２丁目11-33
TEL 077-561-6111
FAX 077-565-6101
HP https://shigajou.or.jp

公共インフラとしての電話リレーサービスが始まります

令和３年７月１日より、公共インフラとしての電話リレーサービスが始まります。そしてこのサービスを利用するための登録が６月１日より始まっています。

これまで、２０１３年より公益財団法人 日本財団が東日本大震災での経験を契機に電話リレーサービスをモデルプロジェクトとして行ってきました。

当センターにおいても当初から、このプロジェクトに参加し、通訳オペレーター業務を行ってまいりました。２０１７年度からは、同プロジェクトに対して厚生労働省からの補助金が入り、これまで全国７カ所12の聴覚障害者情報提供施設が参画していました。

２０１９年からは 首相の答弁を機に国において本格的な制度を設けるべく検討会が設けられ、電話リレーサービスは本来は通信として、現行の電話インフラと同様に、24時間３６５日いつでもどこからでも掛けることができ、緊急通報も可能とし、聞こえる人と双方向の会話が可能なプラットフォームが必要であると提言を受け、「聴覚障害者等による電話の利用の円滑化に関する法律」（令和２年法律第53号）が制定され、令和

２年12月１日に施行されました。

そしてこのサービスを提供するため令和３年１月、総務大臣から、「電話リレーサービス提供機関」として一般財団法人日本財団電話リレーサービスを、「電話リレーサービス支援機関」として一般社団法人電気通信事業者協会を、それぞれ指定され、７月からは負担金の徴収（１番号あたり１円／月）が始まります。

当センターの通訳オペレート業務は６月で終了しますが、今後、聞こえない人聞こえる人がお互いに円滑に利用出来るよう情報提供や利用支援に務めていきいたと考えております。

まずは、聞こえない方については、利用登録の手続きが必要となりますので、チラシＱＲコード（https://nftrs.or.jp/）のホームページから内容をよく読んで登録を行ってください。

登録には専用アプリのインストールや本人確認書類の添付、利用料金（通話料）のプラン、支払方法の選択など、様々な手続きが必要です。お問い合わせは左記の一般財団法人日本財団電話リレーサービスのカスタマーセンターか当センターのＩＴ相談まで。

電話リレーサービス利用のお客さま
サポート（カスタマーセンター）
●電話 03 - 6275 - 0912
●FAX 03 - 6275 - 0913
●メール（フォームから）
https://nftrs.or.jp/contact/
●手話・文字チャットでの窓口
ホームページからアクセス
https://denwa-relay-service.jp/inquiry/select.php

コロナ禍
～この一年の意思疎通支援事業（手話通訳・要約筆記派遣）状況は～

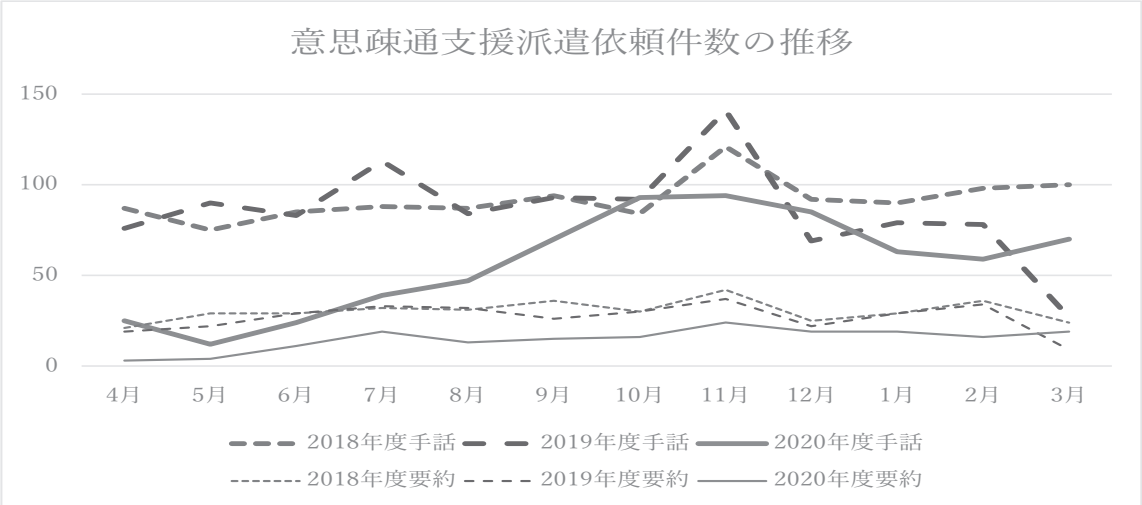
新型コロナウイルスが国内で初めて確認されてから１年半が経過し、私たちの生活も変わってきました。

聞こえる人と聞こえない人のコミュニケーションの場に意思疎通支援者を派遣する制度では、「同行派遣」を基本としつつも、遠隔情報保障など距離を隔てての支援や、音声認識による文字情報などのＩＣＴ（情報通信技術）も開発され、手話通訳や要約筆記の活動も変化しつつあります。

ＺｏｏｍなどのＷＥＢ会議システムも急速に広まりましたが、難聴者・中途失聴者にとっては、音声情報に文字が付与されていなければその情報を理解できません。文字をリアルタイムで会議場面に表示するなどの方法が提案されていますが、難聴者・中途失聴者のニーズやケースに合った適切なサポートが何であるかを当事者と一緒に考えていきたいと思いました。

国や県の指導によるイベントの中止の影響で、聞こえない方が参加する行事が減り、コミュニケーションの場が激減し、さらに、話者の口元がマスクで見えない不安、経済活動の停滞が続くことによる聴覚障害者の孤立や心の問題もあり、メンタル支援も重要な課題と思います。

通訳者としての技術の研鑽はもちろんのこと、社会で孤立させない、当事者に寄り添う気持ちを常に忘れない「意思疎通支援者であること」をあらためて感じています。



2021年度 手話通訳者・要約筆記者の健康管理事業「健康管理講習会」開催

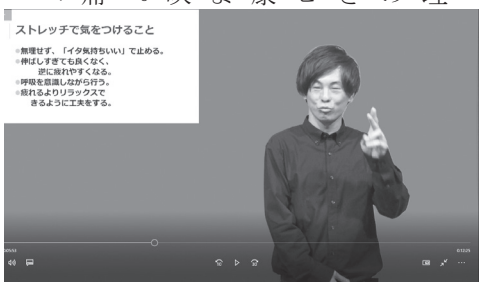
滋賀県聴覚障害者福祉協会・関係団体で構成する健康管理委員会主催の健康管理講習会が、4月24日（土）滋賀県立聴覚障害者センターにて開催されました。

講師の北原 照代氏

講演のテーマは「手話通訳者・要約筆記者がいきいきと活動するために」。講師に滋賀医科大学特任教授の北原照代氏をお迎えし、2020年度頸肩腕検診の結果と予防について学びました。新型コロナウイルス感染防止のため三密（密閉・密集・密接）を避けて20名のみ会場参加とし、講義の様子は後日オンライン配信されました。

まず、新型コロナウイルスについて、「過度に恐れず、しかし油断せず」と日常生活の注意事項を再確認しました。手話通訳者や要約筆記者の活動も、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い影響を受けています。マスクやフェイスシールドを着用しての負担のある通訳、感染の不安、通訳依頼の減少、テレワークなど例年にない対応に追われています。コロナ禍であっても、頸肩腕障害予防など健康管理は必須です。在宅テレワークでは、「20―20―20」の新しいルールの実践が推奨されました。20分毎に、20分の休憩をとり、20フィート（約6m）先を見るようにしましょう。

後半は、理学療法士の森田英昭さんによるビデオ「健康づくりしよう！」が上映されました。肩や腰が痛くなる原因、健康でいるためのポイントを学んだうえで、頸肩腕障害の予防に効果的な10種類のストレッチの紹介と解説がありました。動画での指導は分かりやすく繰り返し学習ができると好評です。



森田英昭氏による動画

滋賀県で手話通訳者の公務災害が申請されて30年余りたちました。歴史は風化させず、しっかりと予防をする。そして、検診の結果が仕事や活動に反映されるよう、今後も学習を積み重ねていきます。

「いざメシを作ろう」3年目は湖北みみの里で開催

いきいき情報教室は6月30日湖北みみの里で行いました。参加者15名が4グループに分かれてご飯、カレー、お汁粉、ゼリーを避難用品や非常食を使って調理しました。講師は長浜市社協のボランティアセンターに協力いただきました。カセットコンロに鍋とザルをセットしお湯を沸かした中に、ポリエチレンの袋に食材を入れてゆでます。ごはんは赤十字奉仕団配布のハイゼックス袋にお米と出しつゆを入れます（避難所で配られます）。男性が慎重にだしつゆを計る様子を見てください！カレーもお汁粉もみんなでワイワイ言いながら完成しました。また、非常時には洗い物を少なくしたいですね。お皿にラップをしておかずを盛るなど、実際に体験することで覚えられます。「いざ」と言う時に作る「メシ」。次回はどんなメニューにしようかな。

慎重に真剣に計ります！

触手話をしながら一緒に調理

要約筆記者を目指す「養成講座パソコンコース」開講

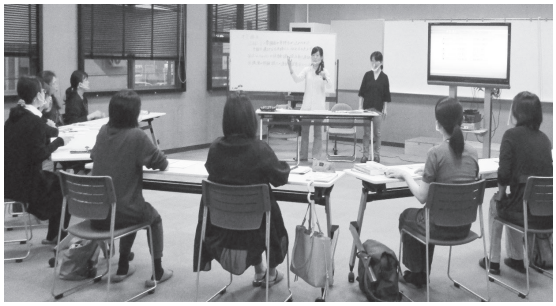
要約筆記者養成講座パソコンコースが5月12日に開講しました。受講生は8名です。今年度はカリキュラムを見直し、5月から翌年1月修了の通年コースとしました。パソコンでの要約技術だけでなく、聴覚障害、福祉などに関する知識、また日本語表記についても学びます。過去の受講生からは「改めて国語の勉強をしているよう」との声がよく聞かれました。「国スポ・障スポボランティアに興味がある」「手話を学んでいて要約筆記を知った」など動機はさまざまですが「聞こえない方の支援ができたら」という受講生の想いは共通です。

開講式では「要約筆記のあり方も、音声認識の普及などにより変化しつつありますが、聞こえない・聞こえにくい方に寄り添う要約筆記者を目指してください」との小竹所長からの挨拶もありました。2022年2月の全国統一試験合格を目指します。

『手話通訳者養成講座（通訳ⅡⅢ）』開　講

昨年度はコロナウイルスの影響で４月開講が５月に延期となりましたが、今年度は無事に予定通り４月に開講することが出来ました。草津と東近江の２コースで計１７名が受講しています。今年度は両コースともに夜７時から９時の開催で、仕事を終えて会場に駆け付ける方もたくさんおられますが、受講生同士で助け合いながら熱心に受講されています。

手話通訳者養成講座では通訳Ⅰ・ⅡⅢを通して、手話通訳に必要な技術や手話通訳者に必要とされる様々な知識を学んでいきます。通訳ⅡⅢではさらに専門職として必要な倫理や責務を学び、事例検討やロールプレイ、観察実習を通して実践的な学びを深めていきます。１０月まで約７ケ月間の講座を終えた後は、１２月に実施される手話通訳者全国統一試験の合格を目指します。



タツノオトシゴ

先日、映像制作会社が舞台の小説を読んだ。好きな作家で図書館の人気ランキングに入っていたという理由だけで借りたが、なかなか面白かった。映画やドラマが作られていく複雑な工程や、それにかかわる人たちの熱意と想像力、数々の苦労やチームワークなど目からうろこの内容が盛りだくさんだった。
最近は映画館へも足が遠のき、その反動でドラマの数が増える。時には録画を消化するのに時間に追われるときもあるが、ついついキャストの演技とストーリーだけに集中してしまっている。小説ではロケーションハンティングといって、撮影場所を監督のイメージに合わせて探しまわるのも大変な苦労とあった。そのようなことも含め、撮影の現場に想像を巡らせながら見てみたいものだ。(K・T)